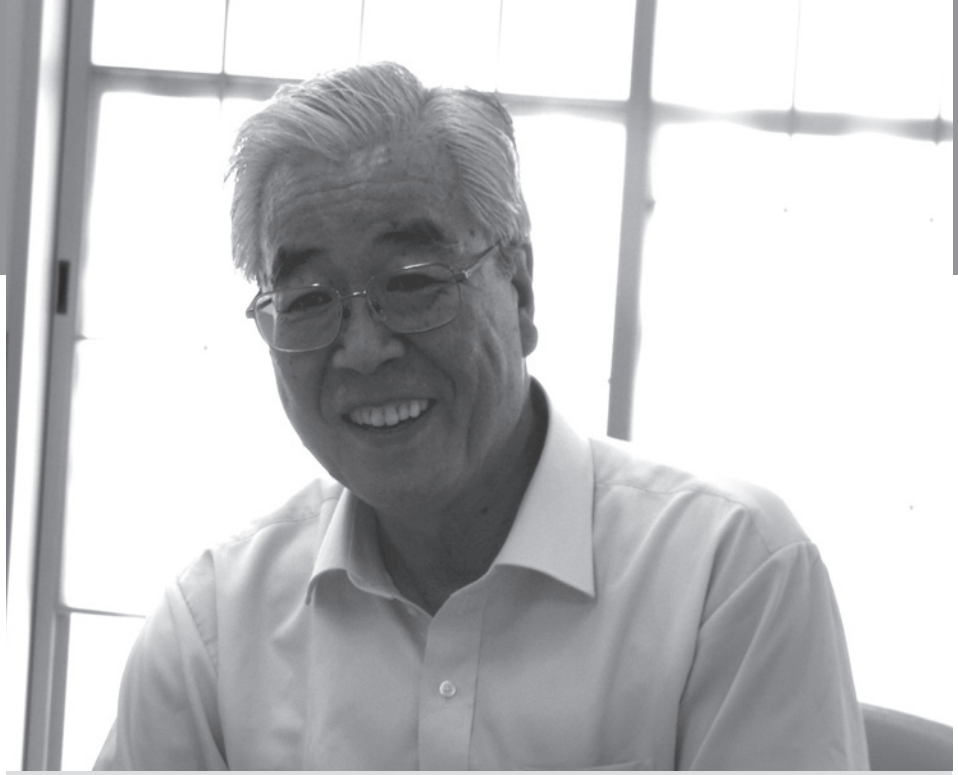
INTERVIEW

宮城県牡鹿郡女川町長
安住宣孝氏



【プロフィール】　安住宣孝（あずみ のぶたか）氏　1945年生まれ.1999年9月より女川町長として活躍,現在3期目を務める.

女川町の復興に向けて

聞き手：山田隆司　　公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長

東日本大震災から，4ヵ月

山田隆司（聞き手）　今回は，東日本大震災で被災した女川町で復興の陣頭指揮をとっていらっしゃる安住宣孝町長のお話を伺います．女川町は，医師不足で医療崩壊の危機に直面しているということで，震災前から地域医療振興協会が支援を開始していたというご縁があります．

今日は7月11日で，ちょうど震災から4ヵ月経ったわけですが，これまでの経緯と現在の情況を教えていただけますか．

安住宣孝　報道でも未曾有の大災害と伝えられていますが，女川町は小さな町ですが，1割弱の死者，不明者を出しており，今さらながら大災害の実態を認識しています．女川町全体の7割，約3,000世帯が自分の家を流され，約5,700人の被災者を抱えることになりました．避難者の中には高齢者も多く，健康管理についてどう対応したらよいかが当初の問題でしたが，4ヵ月経って，震災のショックによる体調不良を訴える方も多く，精神的なケアも含めて，今後の課題になってくると思います．

また，多くの方が財産を流出しましたので，将来への不安が大きくあります．一日も早く復旧，あるいは復興のための計画を進めなければいけないという気持ちで今日まで来ています．お陰

さまで，県，あるいは国の担当者が現地に入り，誠意をもってご提案，ご指導くださっている中で，復興計画策定委員会も５月１日に立ち上げました．現在，４回目の会議を終え，お盆前にはある程度の草案を町民に提案できる段階まで来ました．仮設住宅の建設も進み，避難所の人数もだいぶ減ってきました．

ただ，難しい点は，冬場に災害が起き，今は真夏を迎えて，避難所，あるいは仮設に入居されている方々の健康管理です．建前論では仮設に入居された方は自立を促す方向にありますが，それはなかなか難しい．地元の行政としてはやはりできるだけの対応をしていかなければいけないんじゃないかと思っています．

山田　私も，復興計画策定委員会のメンバーとして参加させていただいて，町長さんはじめ皆さんのご苦労は実感していますが，「復興はこういう方針でいこう」「将来の町づくりはこうしよう」ということをいち早く示されようとしていることは頼もしいと思っています．一方で，５年先，10年先の方向性を決めるのと同時に，今の現実の問題，避難所や仮設住宅で困っていらっしゃる方への対応を同時にしなくてはならない．長期の目標と，短期の現実の問題，その両方をこなしていくのが，町の執行部の皆さんにとっては大変な状況ではないかと感じています．

安住　今回は，局所的な災害ではなかったために，お互い助け合う，譲り合うという環境にはなかなかなり得ません．結果的に，復興の暁までには相当な時間がかかるだろうと思われます．復興対策委員会の中でも，話し合いを重ねた結果，やはり「今後津波への対応をどうするか」ということが重要なテーマであるという認識になりました．８年間での復興を計画していますが，いろいろな意味での時間差，優先順位をどうしていくかというのが課題ではないかと思うのです．ですから，「次年度からはこうします」ということではなく，優先順位を考えながら一歩一歩並行して進めていくことが大きなポイントだと思っています．

山田　町の中心部が壊滅してしまったということで，復旧というよりも，本当に新しい町づくりです．今回のテーマである高台移転は避けられないと思いますが，住民がまだ十分に理解しにくい部分もあると思うのです．今まで豊かだった場所が使えないというのが，やはり歯がゆいですね．

安住　女川町は原子力発電所があって，交付金を豊かにいただいてきたのではないかという指摘があります．実際にそういった一面もありますの

震災から４ヵ月目の女川町

で，そういう意味で他人依存の空気がないともいえない．したがって今，住民の皆さんが自分の生活を取り戻すために，いろいろな計画を進めようとしていく中で，私は行政として表だって構えたくないと思うのです．つまりゼロから，場合によってマイナスから立ち上がるということは，個人個人の意思が重要だと思うのですね．それが住民側から強く示された時に，行政的に後方支援，対応をしていきたいと考えているのです．最初からこちらが形を作っては絶対に駄目だと思います．

山田　そうですね．本当にやる気のある牽引車になりそうな人たちが，積極的に出てくることが重要かもしれませんね．

地域医療振興協会の女川支援

山田　私は，被災直後の町の様子を目の当たりにした時に，またその後の原発の問題も不安定な情勢だったので，正直な話，ひょっとしたらこの町はなくなってしまうのではないか，一つの自治体としての体をなさなくなってしまうのではないかと思いました．しかし，復興委員会を重ね，委員の人たちの意見を聴き，町長さんの先導ぶりを見て，今では新しい町づくりが進んでいるという力強い印象を受けています．町長は，被災した当初，そういった不安は持たれませんでしたか？

安住　私も町長になってから３期を務めていますが，行政の仕事もインフラ整備も町の景観作りも，一挙に現状打開というわけにはいきませんので，少しずつ進めてきたというところがあります．そんな中で今回の災害ですべて流失した姿を見て，これまでさまざまなことを細やかにやってきた経験から次のステップはどうしたらよいか，避難しながらも考えていました．

山田　そうなのですね．

安住　とはいえ，住民の理解なくして町づくりは不可能です．特に，地域の医療に関しては窮地に追い込まれていた時に，地域医療振興協会の皆さん方が支援してくださるという決断をしてくださった．そして，もうすぐ地域医療振興協会による新体制で病院をスタートするという目前となってこの災害です．われわれ自体もどうなるのだろうと心配になったことは間違いありませ

復興を祈願して病院でも七夕の飾り付けをした

ん．しかし，協会の皆さん方の対応は私の想像を遙かに超えていました．震災で町役場の庁舎が壊れてしまったあと，われわれは第二小学校に本部を設置して避難していました．そして津波によって町と病院は分離され，行き来も途絶えました．そういう中で，女川の医療を守るために，協会の全国の皆さんがヘリコプターを飛ばして，ヘリポートとはいえないヘリポートに着陸して支援に駆けつけてくださった．本当に感嘆の一語に尽きました．

山田　ありがとうございます．当協会には全国のネットワークがあり，最初の時点で呼びかけたところ，居ても立ってもいられないので手伝わせてほしいと，志の高い人がたくさん手を挙げてくれました．そういう意味では，医療者というのは，今，目の前の病気の人，今，目の前で困っている人のために力を尽くしたいと思うのだと思いますが，まだ原発の情報もなく，あるいはインフラの状況も全く分からない状況で，大勢の手が挙がったことには，私も本当に驚きました．

今回の被害は非常に広範なため，たとえばDMATやその他の団体もスポットを決めて，対応せざるを得ませんでした．どう役割分担していくかの調整をするのはかなり困難だったと思います．協会にとっては単に公益法人として被災を経験したというよりも，被災地の中に支援に取り組んでいた女川という地域が含まれていたので，「女川町を救え」という旗印がつけやすかった．そして女川という一つの地域だけで手いっぱいではないかと考えられたので，総力を挙げて女川への支援に取り組めたのです．本当に初期の数週間は，寝るところも食べるものも自分たちの責任でしたし，それから２ヵ月間くらい，多くの職員が自立して支援をしてくれた．今回，私もいい勉強をさせてもらったと思っています．

安住　行政の立場で，このような災害に何をすべきかを考えたときに，いわゆる難しいことはいらない．いちばん大切なのは命と財産を守ることだということに徹することで，指揮がはっきりしてきます．その後いろいろな問題が出てきたときにも，必ずそこにフィードバックする．住民の命や財産を守るという基本に立ち帰って考え，そして行動するということがいかに大切か，改めて感じさせられました．

急性期を過ぎ，維持期の課題

山田　最初の数週間から４ヵ月が経ち，また今後10年を見通した長期計画もある程度指針が見えてきました．しかし４ヵ月が過ぎて，いろいろな地域から，組織的な支援が徐々に手を引いていっています．県の医療チームや日赤などの支援がなくなって，これからの半年，あるいは１年，２年には，今までの４ヵ月とは全く違う，新たな課題があると思います．仮設住宅に移ったとはいってもなかなか復旧が進まない問題，あるいは被災をして家族の不幸なども抱えながらこれまで気丈にやってきた人たちの今後の数ヵ月，数年にわたる精神的なケアを考えていかなくてはなりません．特に福祉や保健担当者とわれわれ医療者，住民サービスの一番基本的なことを支える者としては，とても大事な時期です．これからが本番だと，私は思っています．

安住　このような災害になって，やはり日本，日本人のよい点を見直した気がしています．隣近所の付き合い，人同士の助け合いというものがいかに大事かということを思い出させられた．何が失われ，何が必要なのかということを考えさせられた．今回の災害はそういうものだったと

思っています.

私は，最初の公聴会のときに，何ヵ所かで基本的な話をさせてもらった中で,「いわゆる天災，人災がある. 皆さんが被害を受けた今回の津波はまさに天災です. もし別な自分の尺度の範囲の事件であったなら喧嘩になりますが，今回だけは喧嘩にならない. そこからスタートしましょう」と，そういう話をしました.

山田　そうですね. そういう意味では，町民の人たちがまとまりやすいかもしれませんね.

今回，復興計画の大きな指針ができましたので，それに則って，今度は住民が主体になって，こういうことをやらせてほしい，こういうことをやってみようと，お互いに力を合わせた地域づくりの取り組みができるといいと思うのです.

医療はインフラのひとつ

山田　そういった新しい地域作りの取り組みの中で，医療を受け持つわれわれができることは，慢性疾患のある人たちを適切に治療する，要介護の人をサポートする，仮設住宅で具合の悪くなった人たちをサポートするといった，どちらかというと縁の下の力持ちといった部分です. 女川町には病院があるからそういったことだけは心配ない，病院があるから町に帰ってこられたと言っていただけると本当にありがたいですね.

安住　やはり病院があるという安心感は大きいと思います.

山田　病院がなくなってしまった南三陸や，雄勝などに比べたら，女川町は被災したとはいえ，病院が残って，皆さんが戻ってこられる. その助けに少しでもなれば，私たちにとってもやり甲斐は大きいです. 齋藤 充院長も話していますが，これからは患者さんが来るのを待っているだけではなく，仮設住宅や離島，半島部など，通院するのさえ阻まれているような人たちのところにとにかく出ていって，手を差し伸べて，ここだからできたということをぜひやりたいと考えています. 新しい町づくりといっしょに，病院の方針を大転換していかないといけないと思っています.

安住　行政も場合によってはお医者さんと同じように，みんなが気やすく相談できる，あるいは精神的にもホッとする，そういう雰囲気が必要なのではないかと思っています. 住民の方も核家族ではなくて，やはり一つ屋根の下に3世帯ぐらいが一緒に住むというのが私は理想なのではないかと思うのですね. それが本来の日本のよさだったと感じています. 特に地方の場合は，伝承的なことも含めてそういったことを大切にしてきたのではないでしょうか

病院も今後の計画では老人保健施設と診療所という形に変わる予定ですが，今まで以上に手厚く，住民が足を運ぶ施設になってくると，とてもいい雰囲気の町になっていくのではないかと私は思います.

山田　私はこの地域が本当に好きなのですね. また半島部の，効率が悪い，不便だと思われるところにこそ，女川らしさが残っていて，そういう離島・半島部の小さな浜の人たちの元気な姿が残っていくといいなと感じています.

安住　そうですね. 浜の人ほど，我慢もしながら，地域の自立を考えながら，助け合ってきたのです. 町中に比べて結束力も強いのではないかと思います.

山田　この秋からは町立病院の時代から比べると病院の機能は小さくなりますが，その分，在宅や仮設住宅も含めて，小さな集落や離島部にも出向

いていける．仮設にも集会場を作るところが多いようなので，定期的に訪問診療や訪問看護をしていきたいと思っています．

安住　女川町の集落は多くて60世帯ぐらいですが，仮設住宅はそれをはるかに超える二百何世帯が入り，一つのコミュニティになります．同じ町とはいえ，周りは知らない人ばかりということもあり，過去の例を見ても，やはり知り合いがいないために鬱になったりなどがあったようです．それが今，行政的な課題です．体育館の避難所で千何百人が一緒に生活していたときにも，行政マンがまとめようとしてもまず不可能に近かった．そこで各部屋ごとに班長を置くことによって，ずいぶん統制がとれたようです．

山田　保健医療福祉に携わっている中で，今後，そういった新しい仮設の地域をサポートするための行政組織のようなものが必要だと私も感じます．各職種がそれぞれ動くよりも，看護師や保健師，民生委員，ボランティア，あるいはサポーターが一体となってやっていかないと．仮設の地域づくりも含めて，みんなで総合的に役割分担を考える．復興計画の方向性がこの夏に大体まとまったあとは，数ヵ月から数年かけて，医療保健福祉も含めたきめの細かい行政サービスの総合計画を考えていきたいですね．

安住　そうですね．震災以前から，そういった話はありました．これまでは地域の保健師や栄養士などと病院との連携が少なかったということがあります．患者さんや住民を総合的にみることが大事だということは，先生が前から話されていましたね．

山田　今回，われわれが女川町の医療をお手伝いする際に，病院機能を縮小して老健と合併するという計画を１年かけて進めていくつもりでしたが，今回の震災によって，期せずして，ごく短期間のうちにわれわれの計画と似たような形ができてしまった．そしてこの大きな災害を経験したことで，みんなが飛躍的に鍛えられた．限られたものを使ってできるだけ町民のためにやろうという意気込み，心意気のようなものが強まった．失ったものはとても大きいものの，残った人たちが得難い経験をして，強くなった．この熱が冷めないうちに，待っているのではなく，自分たちで新しい病院を作っていこうという方向にぜひなってほしいと思います．

聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長　山田隆司

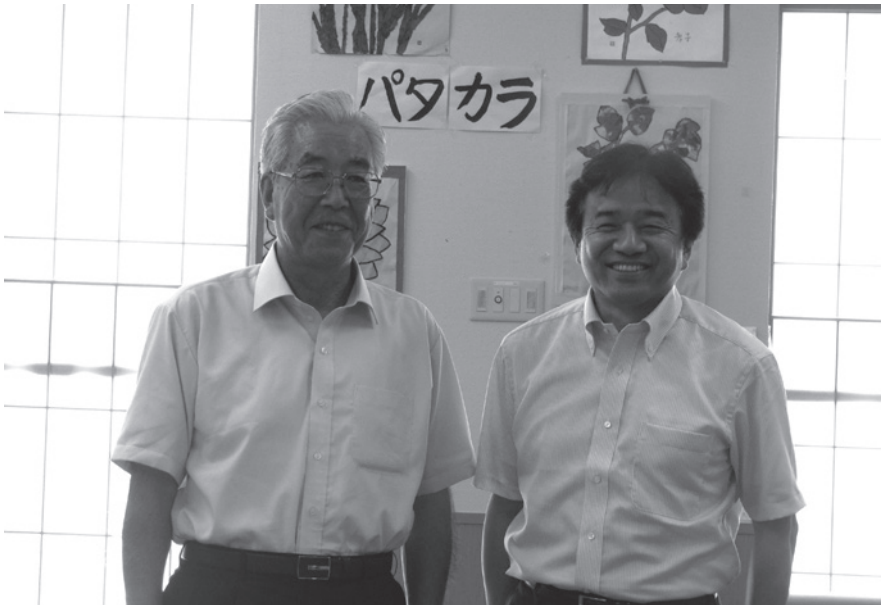
安住　齋藤院長も同じことをおっしゃっていました．今回，地域医療振興協会に病院の運営をお任せすることになって，職員は公務員から民間の組織になることに対してかなり動揺がありました．誰しも今後の自分の身分は？とか待遇は？ということが心配になるものです．しかし，やはり医療職という使命感が満たされるということは大切なことで，今回，期待を持てるような雰囲気になってきています．復興のためには絶対に必要です．

山田　そうですね．復興計画がまとまりつつあり，時間はかかるとは思いますが，やがてその青写真に描かれたような町がこの眼下に広がることと思います．

医療者と住民が力を合わせて

山田　それでは，最後に，この月刊誌の読者は離島や山間へき地で頑張っている医師が中心なので，何かメッセージをお願いできますか．

安住　テレビの『Dr.コトー』というドラマをいつも観ていたのですが，島民から批判されながらも，人として接していく．そういうところに本当の意味での医療というものがあるような気がして，とても感動しました．女川町のような地域の医療を考えたときにも，医療者と住民の両方の歩み寄りが必要で，うまく一緒にやっていくことが大事なのだと感じます．医療というのは絶対に必要なものですから，地域の医療に携わる先生たちにはそういう思いで頑張っていただきたいと思います．

山田　目先の医療技術だけではなく，住民とのかかわりを通して信頼を培っていく．そういう意味で地域医療は，医療の最前線といえるかも知れません．

安住町長，今日はありがとうございました．これからも女川町の復興に向けて，一緒に頑張りましょう．